

タイトル (テーマ)

「架け橋」を作る

～小さな半島の小さな学校と遠くの国の小さな学校と一緒にできること～

氏名 鎌田 幸子 (むつ市立むつ中学校)
 実践教科 総合・道徳・学活 時間数 総合1・道徳2・学活2

対象生徒・学年 (総合) 中学 1年 対象人数 (総合) 94名
(道徳・学活) 1年3組 (道徳・学活) 32名

(1) カリキュラム案

①実践の目的

生徒の実態として、明るく元気な生徒たちであるが「今がよければよい」とか「なりたい職業がない」、人に感謝される経験が少ない、という面も持ち合わせている。青森県下北半島において「世界」を感じることや経験が少ない生徒にとって、他の国のことを深く考えたり、他の国のために自分が一歩踏み出す、アクションを起こす、という機会を得ることは大きな意味を持つと考えた。「知る」ことが「考える」きっかけとなり、「感じる」ことは「行動する」のステップにつながる。「総合的な学習の時間」を「知る」時間、道徳を「感じる」時間、学活を「行動する」時間と考え、教科・領域をまたいで、下北半島の小さな中学校から大陸をまたぐ大きな架け橋を作りたいと考え、設定した。

②授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 (総合) テーマ: ウガンダ基礎データ ねらい: 知識の乏しい一国 (ウガンダ) について、興味を持たせる。	(1) 基本的な情報提示 ウガンダの場所・通貨・国旗・国鳥、人々の「衣・食・住」 (2) ウガンダで頑張る日本人の姿	(1) パワーポイント (2) 現地の通貨 (3) 現地で買ったいろいろなもの
2限目 (道徳) 内容項目4ー(10) テーマ: ウガンダの子ども達 (少年兵) ねらい: 厳しい状況に身を置く同じ10代の少年兵について知り、生きたいように生きられない悲しみに触れさせる。また、世界の平和のためになにができるか考えさせる。	(1) 少年兵の作った「詩」を提示 (2) 「10の物語 世界の人たちにもっと知ってほしいこと」の提示 (読み物資料として) (3) 同じ世代の子ども達の、日本の子ども達とは異なる生活や生き方について考えさせる	(1) NICEFホームページ資料 (2) NHKドキュメント (3) 少年兵の作った「詩」
3限目 (道徳) 内容項目4ー(10) テーマ: ビクトリア小学校 ねらい: ウガンダの子ども達を取り巻く状況を知り、自分たちが寄付した文房具がもたらしたことについて考えさせる。	(1) ビクトリア小の子ども達のいきいきと歌ったり踊ったりしているビデオを見せる (2) 置かれている状況を提示する (3) 「孤児」の多い社会について考えさせる (4) 河地さんからの感謝のメールを読ませる	(1) 子ども達が踊っているビデオ (2) 河地隊員からのメール (3) 孤児の作った刺繍
4・5限目 (学活) テーマ: ハンドメイド・ハートメイドの教材作り ねらい: 「筆記用具を寄贈した」→「感謝された」、	(1) 「ビクトリア小にあったらいい教材」について考えさせる (2) 班ごと、テーマごとに教材作りを行う。	(1) 各家庭で使わないカレンダー (2) 掛け地図のモデル (3) 九九、図形などのモデル

(2) 授業の詳細

1 限目 (総合)

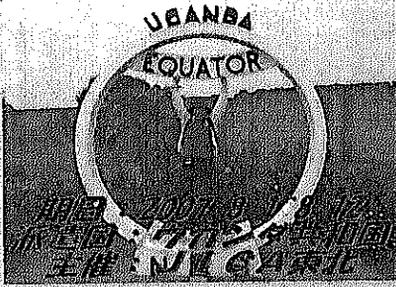
テーマ：ウガンダについて知る

ねらい：あらかじめ持っている情報量の少ない一国（ウガンダ）について、興味を持たせる。

始めに、ウガンダの持つイメージを生徒に尋ねると、「砂漠」や「サファリ」「貧しい」など、私が研修前に抱いていたイメージと大差がなかった。実際にウガンダに行ってみて驚いたことやものを提示し、ウガンダへの興味関心を持つような工夫を心がけた。

そこで、以下のようなプレゼンテーションを行った。

教師海外研修報告会



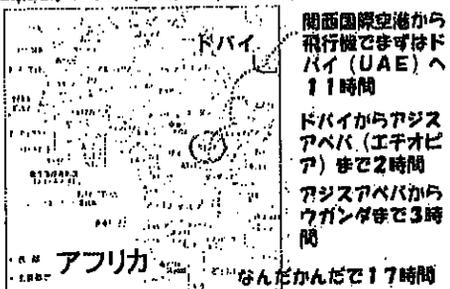
「無知の知」



赤道をまたぎました。

私自身が勝手に抱いていたイメージ

ウガンダってどんな国？



ウガンダってどんな国？

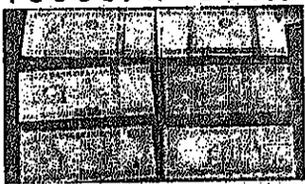


17時間のフライト・おそろべドバイ空港

白ナイル、エジプトまで6000km続く最初の気泡

お金と価値

通貨：ウガンダシリング(Ush.)
1650シル=1ドル ミネラルウォーター1本
10000シル=800円 500Ush
日本円で40円

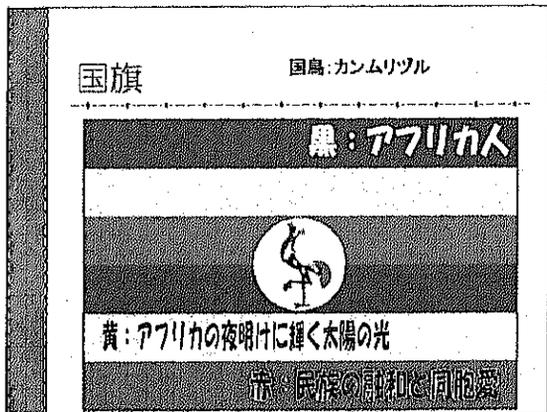


大統領：ムセベニ



紙幣にはその国の文化が表れる

訪れた様々な場所で見られた大統領の写真



国旗・国鳥・3色が意味するもの



動物園にいました。



ゆったりとして、色とりどりの民族衣装



大人も子どもも、おしゃれなヘアスタイル。



鮮やかな制服。元気に見える色。



何から食べようかな～。目新しいものばかりです。



バナナが主食で、皮で包んで蒸す。
洗い物が少なくて済む。



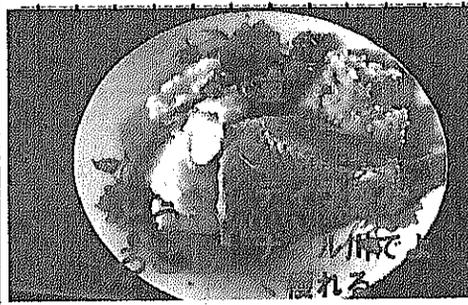
ホテルの朝食。(ほとんど毎日変わらない。)

「食」先生のランチ



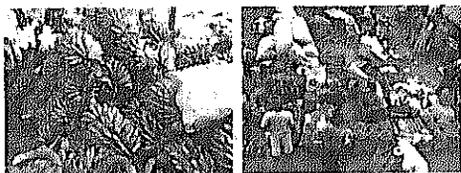
先生は給食、生徒はお弁当かお昼なし。

「食」先生のランチ



お客様用、かな。素材本来の味をいかしたものの。

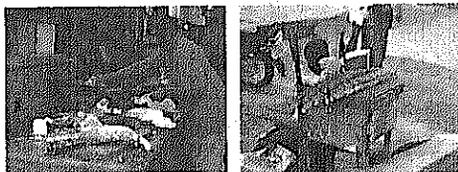
「食」マーケット



バナナの種類は トマト(20個ぐらい)
30~50とも 一山50円

道ばたに山のように積まれたバナナ、
日本のトマトより格段安いトマト

「食」マーケット



ティラピア さとうきび
(sugarcane)

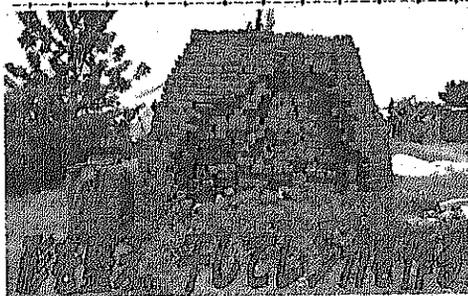
ナイル川でとれる淡水魚(ティラピア)でかい!
子どもがしゃぶる、おやつやさとうきび。

「住」これはなんだろう...



道ばたに、蟻塚。

「住」*蟻塚が こうなります。



「住」

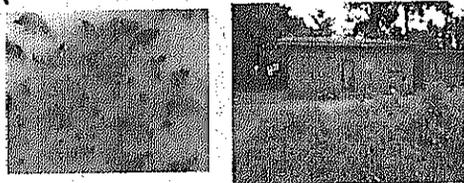


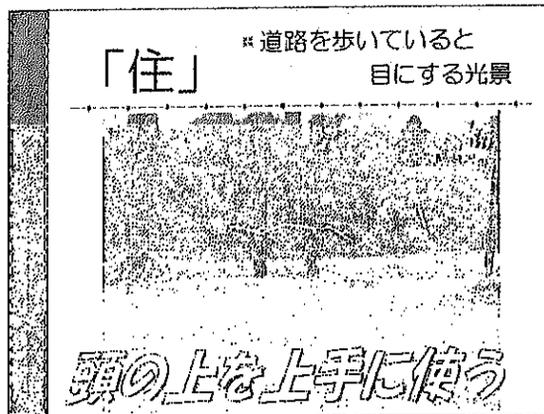
家も...
学校も...
レンガ造りの建物が多い

「住」

*日本では「家をだめにする」シロアリも...

*ウガンダでは「家を建てるために大切な生き物」なのです。





大人も子どもも、頭の上にざるやらポリタンクやら。



車を持たない家庭にとっては
自転車が貴重な交通手段。

日本では外で遊ぶ子ども達が減っていると言いますが。



遊ぶのも、まったりするのも、外が好きなようです。



スプレー、蚊取り線香、蚊や・・・、ハマダラ蚊などの蚊から身を守る。マラリア予防の必須アイテム。

「住」

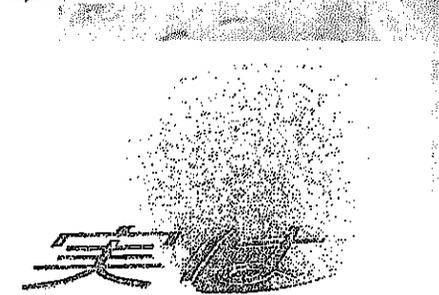
何の穴？



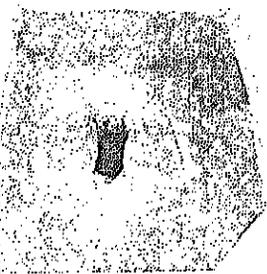
とある学校で見つけました。

「住」かなり深いようですが...

美



「住」 答え -



「住」



3年くらいしたら、また次の穴ほり。

ウガンダで活躍する日本人①
吉永さん (村落開発普及員)

元 種屋さん

整地して
ネリカ米を
作っている



でっかくおれるかな〜と書いて

アフリカの大地にあう稲作を普及。

ウガンダで活躍する日本人②
小田島さん (野球)

ウガンダ中学校の先生



学校の先生を辞めて熱血野球指導。

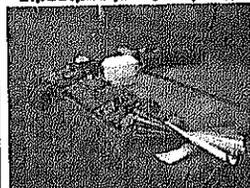
ウガンダで活躍する日本人②
小田島さん (野球)

野球を通じて
ジェントルマン (紳士)



この真剣な眼差しを見よ。

ウガンダで活躍する日本人②
小田島さん (野球)



ウガンダ中学校の先生



強くなるためには、まずは心から。

ウガンダで活躍する日本人③
唐橋さん（自動車整備）



協力隊員になる理由は一様ではないのですね。

ウガンダで活躍する日本人③
唐橋さん（自動車整備）



自分の力量を発揮して感謝されることの幸せ。

ウガンダで活躍する日本人③
唐橋さん（自動車整備）



中古車の利用が高いウガンダでは車だけの問題ではなくて、道路や環境汚染など、様々な問題もついてまわるようです。

ウガンダで活躍する日本人③
唐橋さん（自動車整備）



ウガンダで活躍する日本人④
坪井専門家（農業研究）



アフリカにもともとある農作物との共存が可能な稲作、もともとある食文化を絶やさずに、アフリカの人々の生活に貢献している。

ウガンダで活躍する日本人④
坪井さん（農業研究）

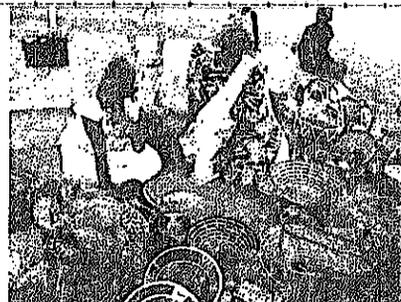


ウガンダで活躍する日本人⑤
市嶋さん（家政）



自分の小学校の先生が行っていたフォスターチルドレンとの文通をきっかけに国際交流へ。

ウガンダで活躍する日本人⑥
市嶋さん（家政）



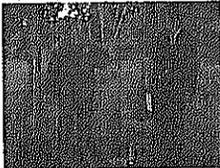
エイズによって夫を失った女性の自立を支援している。バナナの皮を利用して籐のかごをつくったり、ビーズアクセを作ったりする仕事をコーディネートしている。

ウガンダで活躍する日本人⑤
市嶋さん（家政）



自分の服やバッグやポーチ、ビーズアクセなどを作る

ウガンダで活躍する日本人
吉田さん（おまけ）



JICA職員
企画調整員
吉田 耕平
学芸大付属高校卒→慶應義塾大学
JICAに就職→外務省に outward(3年)→JICAウガンダ事務所勤務

学級に同姓同名の生徒がいたことから協力隊員ではありませんが、吉田さんも紹介しました。

吉田さんからのメール

田中さん
ご丁寧なメールをありがとうございます。カンパラは今日は雨も降っておらず、かといって暑すぎず、とてもよい気候です。
私自身は、JICAに入ってから中東やアフリカのご縁が続き、特別に出席したりして、正直なところ「日本国内に国際協力の経験を広げよう」という方向の仕事に携わってきませんでした。したがって、今回の1泊2日の短期間ではありましたが同行させていただいたことや、いろいろなお話・質問をお聞きできたことは大変貴重な経験でした。誠に申し訳ありません。
ウガンダはとてもよい国だと思いますが、日本での知名度が非常に低い国の一つです。ウガンダのことについて、生徒のみなさん、職場のみなさん、身の回りの方々に「宣伝」していただけると大変うれしく思います。
なにかは日報や追加のご質問などがありましたらいつでもメールいただければと思います。それでは失礼致します。
(吉田ウヘイ君によろしくお伝え下さい)
D
Y
E

ウガンダで得たもの

①「ウガンダ」の勝手なイメージをくつがえすことができた
行ってみないとわからないことばかり。
実際に目で見て、においを感じて、現地の人の食べるものを同じように食べて、心で感じる事ができた。
学んだことが次につながる。「もっと知りたい」と思った。

まとめ

ウガンダで得たもの

③日本のよさ・ウガンダのよさ。どちらも「アリ」

④勉強不足、まだまだ「発展途上」の自分を再発見

ご静聴ありがとうございました。



ぜひ、一度ウガンダへお越しください。
(by 在むつウガンダ親善大使)

生徒の感想

- ウガンダでのいろんな写真を見ながら話を聞いて、ウガンダがどこの国にあるのかわかったし、通貨や言葉などもわかった。あんなに物が安く買えるなんて、驚いた。遠くの国で、日本人がいろいろ手助けしているんだということがわかって、なんだかうれしく思った。僕たちは樂をしすぎだ、ということも考えることができた。
- 鎌田先生が夏休み中に「ウガンダ」という国に行って「ウガンダ」という不思議な国のことがとてもよくわかりました。例えば、女の子の髪型がすごくきれいに編み込んであって感動しました。でもそれは付け髪でした。それも驚きました。食べ物も、水がとても貴重なので、洗いや物が少なくて済むように、1つの皿にあれもこれも入れていました。私もちょっと節約しよう

と思った。

- ・ 私は、鎌田先生の話聞いて、「楽しそうだな」と思いました。でも、その裏には、子ども達の健康など、いろんな問題があって、まだあまりよくわからないけど「大変そうだな」とも考えました。私たちとは違う生活ぶりにびっくりしましたが、私たちよりずっと楽しそうに笑って今を「生きている」子ども達の写真を見て感心しました。私も笑って今を生きてたいです。
- ・ 日本では迷惑な白アリも、ウガンダでは白アリの作った蟻塚からできるレンガに人々が住んでいるということで、スゴイと思った。私も一度行ってみたいと思いました。
- ・ 鎌田先生がウガンダに行くと思った時は、「それ、どこにあるの?」と思いました。でも今日の話聞いて、どこにあるのか、どんな国なのかいろいろわかったし、ウガンダにもたくさんの日本人がいて、活躍していることもわかりました。他にも知らない国を調べてみたいですね。
- ・ ウガンダに日本人が日本から派遣されたり、農業や技術を現地の人に教えたりしている人たちは僕から見たらなんかかっこいいなと思えました。一度でいいから、どこかの国に行きたいです。
- ・ 私はウガンダのご飯を見て興味を持ちました。「本当においしいのかな?」と考えたり、トマトがとっても安かったり、バナナが主食だったり、不思議なことがたくさんでした。また、印象に残ったのは、蚊の虫さされ対策です。虫除けスプレーや蚊取り線香など、絶対にさされない対策をしていて、蚊にさされると大変な病気になったりすると聞いてびっくりしました。
- ・ ウガンダには象やシマウマなど、いっぱい動物がいるところだと思っていたけれど、本当は違って、あと日本人も思ったよりいっぱいいてびっくりしました。ウガンダにいる日本人はみんな人のために頑張っていて、すごいなと思ったし、家族と離れてでもウガンダに来ていて、みんなウガンダを愛しているなあと感じた。私は今日の話を聞いて、ウガンダは人と人が協力しているよい国なんだと思えました。

2 限目 (道徳)

テーマ：ウガンダの子ども達 (少年兵) 価値項目：4－(10)

ねらい：厳しい状況に身を置く同じ10代の少年兵について知り、世界の平和のためになにができるか考えさせる。

① あるウガンダ人の少年兵が作った詩を提示する。

なぜ私たちが粗末にするのか
例えばエイズの危険にさらすのか
私たちはとても混乱している
私たちを混乱させ
麻薬を使い
若いうちから売春をさせる

愛・教育・避難所が必要だ
私たちに生きる機会と
保護してもらう機会を
与えてほしい
私たちはゲリラではありません
私たちはとても優しい
愛すべき存在です

○この詩を作った人はどんな人か、想像してみよう

- ・ 14歳くらい。
- ・ アフガニスタンあたりに住んでいる
- ・ フィリピンなど、アジア??
- ・ 10代。若い。
- ・ 本当は優しいのにそうじゃないと思われる
- ・ イラクなど戦争がある国にいる子ども。
- ・ 北朝鮮。

○どんな生活をしているだろうか。

- ・ 貧しくて自分の家がない。 ・ 親がいない
- ・ 苦しい生活。
- ・ 周りに助けてくれる人がいない生活。
- ・ 麻薬をやりたくないのにやっている。
- ・ 愛に飢えた生活
- ・ 学校に行っていない。

② NHKドキュメント「少年兵を生んだのはだれか」を見せる

③ 感想を発表しあう

生徒の感想

- ・ 少年兵は自分の家族を殺さなきゃいけない、なにもしていない、悪くない人をも殺さなきゃいけない、おそろしくて、無意味なものだ。すごく悲しいことだと思った。でも自分から希望して入っている人も入ってこたもわかつた。自分が住んでいる場所は少年兵に比べたらとつてもとつてもいい場所だなつて思つた。だから、早く少年兵の世界がなくなればいいなつて思つた。
- ・ 「少年兵」とか「子ども兵」という言葉があることがショックだつたが、今日の少年兵のDVDを見て、10代の人がつ30万人くらい少年兵になつて入ると知つて、かなり驚いた。
- ・ ウガンダの少年兵がかわいそうで仕方ありません。それに対して、私たちが自由すぎです。ウガンダの少年兵は殺したくない家族を殺して、日本では、いじめなどで人を殺しておもしろがつている。そんな人たちがバカみたいに思えてきました。自由を奪われたウガンダの少年兵に、なんかしてやることのできないかと、自分は思つます。
- ・ ウガンダや他の国では、自分の親を殺したり、脱走して保護されたとしても夜に知らない人と避難所で暮らしたり、など、今まで自分が全く経験したことのなつこと・自分の望まなつことを命令されたりしていることを初めて知つた。ウガンダでは多くの子ども達が少年兵になつて入つたことが残念だつて思つた。私たちが少しは関係あるつて思つた。
- ・ ウガンダなどの国には少年兵がつ30万人も入つて、殺したくないのに村の人たちを殺したり傷つけたりしてかわいそうだつて思つた。日本は戦争とかがないから、そんな子ども達を助けてあげたいつて思つた。
- ・ 今日のビデオや詩を読んで、日本では考えられないことが世界でたやすく起きているんだなつて思つました。私と同じ年でも2人も殺したことがあるつていう子ども、母親の腕を切つたつていう子どもがついてぞつとしました。少年兵という制度がない世界になつてほしいなつて思つます。

3 限目 (道徳)

テーマ：ウガンダの子どもたち（ビクトリア小学校の子ども達）

ねらい：ウガンダの子ども達を取り巻く状況を知り、自分たちが寄付した文房具がもたらしたことにつて考えさせる。

- ① ビクトリア小の子ども達のはつらつと歌い踊る映像を見せる。
- ② どんな子ども達だろうか。
 - ・ とにかく明るい！！
 - ・ 元気
 - ・ 興味津々。
 - ・ 仲良しな感じ。
- ③ 子どもの実態を説明する。
 - ・ 400人を超える生徒数の80%は孤児。
 - ・ 両親をエイズによって失つたエイズ孤児も多い。
 - ・ 寄宿舎での生活。
 - ・ 勉強する場所、教室、など、施設に関すること。
 - ・ 教えてくれる先生。
- ④ 河地隊員（現職参加）から、1年3組あてに届いたメールを読む。

河地さんからのメール

青森県むつ市立むつ中学校1年3組のみなさん

はじめまして、ウガンダビクトリア小学校の河地洋明です。鎌田先生を通じて、鉛筆をはじめ、文房具を寄付してくれて本当にありがとうございます。

埼玉からも寄付してもらって、12月7日の3学期の終了式で一人一人の手に渡すことができました。350人の手に日本からの鉛筆が手渡され、子どもたちは、地球がひっくり返ったように喜んでいました。

本当にどうもありがとう！

ウガンダに来て、まだ半年、やっと生活に慣れてきたという感じですが、子どもたちからたくさんのことを学んでいます。来たばかりの頃は、アフリカらしさって何だろう、日本の子どもたちに何を伝えよう、など、考えすぎていたのかもしれませんが。

最近、「先生、あそこにカメレオンがいるよ」とか「そろそろ雨が降ってくるね」など、子どもがいう一言一言から、「あ、アフリカにいるんだなあ」と実感するようになってきました。

鎌田先生たちは、夏にビクトリア小を訪れた際、子どもたちの笑顔に感動し、その場で500冊近いノートを買って届けてくれました。「子どもたちはノートさえないんです。」といった自分の

一言に、すぐに反応し、先生方で寄付してくれた500冊のノート。ビクトリア小の子どもたちは心から喜んでその寄付を受けました。

会って次の日に、山のようなノートを届けてくれた先生方のその行動力に、人のあたたかさを感じていたようです。援助って何だろう。時々考えさせられます。でも、先生方のその援助は子どもたちに物をくれたのではなく、心くれたのだな、と感じました。

そして、帰り際に置いていってくださった、日本の子どもたちからの鉛筆や文房具、「一人一人に同じ時間に渡したい」「誰かがもらい、誰かがもらえなかった、そんなことから笑顔になってほしいというみなさんの思いを、悲しみにしてほしいくない」そんな思いから、ずっと家に保管しておいて、ようやく、「クリスマスプレゼントが届いたよ」と言って、12月7日に子どもたちに渡しました。

少し時間がたってしまいましたが、みなさんの気持ちを、確実に子どもたちに届けました。安心してください。

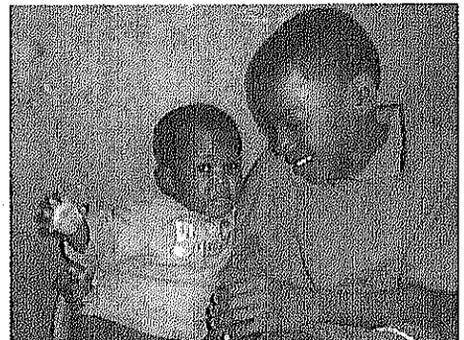
日本にいる間、教員という仕事をしながら、若くしてガンになってしまった子どもたちやひきこもりになってしまっている子どもたち、不登校の子どもたちに対して、ボランティアをしていました。新潟の地震の時も、現地に行って、避難所のボランティアをしてきました。その時々、人の命の尊さ、ボランティアはしているのではなく、ボランティアを通して学ばせてもらえることなどを感じてきました。

そして、今、アフリカに来ることが許されて、ボランティアとして、ウガンダの小学校で働いています。20歳の頃からの夢だった、アフリカに行きたいという夢が、7年たってようやく叶いました。夢が叶ったというのは、また新たなスタートである気がします。今、目の前にいる子どもたちからたくさんのことを学ばせてもらっています。親を病気で亡くしてしまった子どもがいます。自分もいつ死んでしまうかわからない病気になってしまっている子どももいます。生まれた時から、お父さんの顔もお母さんの顔も知らないまま、この学校にいる子どももいます。

でも、みんながきらきらした顔をしています。何でそんなにきらきらしているのかなあ、と不思議に思うくらいです。上の子が下の子の面倒を見て、さらに下の子が入ってきたら、今度は下だった子が上の子のマネをして面倒をみる…。この学校は家族みたいな学校です。ここで、この子どもたちと出会えて本当によかったと思います。

むつ中学校1年3組のみなさんは、もうすぐ、2年生になりますね。私が、小学校の先生になりたいと思ったのは中学校2年生の時でした。いろいろなことを考えたり、動いたりする時期なのかもしれませんね。

鎌田先生のおかげで、ビクトリア小学校の子どもたちとむつ中学校のみなさんがつながれたこと、心からうれしく思います。本来なら、手書きで手紙を書きたかったところですが、年末ま



でに青森に届くかどうか不安だったので、このようにして感謝の手紙とさせていただきます。

寒さがきびしくなってくる頃だとは思いますが、ウガンダの子どもたちも厳しさを喜びにかえてがんばっています。厳しい時こそ、うれしいことがあったときは2倍も3倍もうれしく感じたりして・・・。

みなさんの気持ちがウガンダの子どもたちのその喜びとなりました。

2008年、ますますみなさんが輝けることを、ウガンダから祈っています。

Merry Christmas and A Happy New Year!!

ウガンダ青年海外協力隊
ビクトリア小学校 河地洋明

生徒の感想

- ・ 河地さんからの手紙を読んで感じたことは、自分が何気なく先生に渡した筆記用具が、今、ウガンダのビクトリア小学校のみんなには私の気持ちの何倍にもなって届いている、ということがとても嬉しかったです。鉛筆1本だけだと私は感じていたけれど、手紙を読むと、鉛筆1本でも大事にする大切さが伝わってきました。
- ・ ビクトリア小学校には親のいない子ども達がたくさんいるけど、あんなに元気で明るくて感動した。文房具とかが買えなくて、私たちが寄付した物が、河地さんの手紙に載っていた画像みたいにごく喜んでくれて、寄付してよかったな—と思った。
- ・ この授業を通して、ビクトリア小学校の子ども達は雨の日は床がぐちゃぐちゃでゆっくり眠れるのかなあと心配になりました。逆に、いいな、と思ったことは、子ども達が家族みたいな感じで、とても楽しそうだったことです。
- ・ ぼくはこのウガンダ・ビクトリア小学校にみんなで寄付した鉛筆がこんなに喜んでくれるとは思いませんでした。先生方が500冊のノートをプレゼントしていました。すごいですね。みんな今頃よろこんでノートで勉強しているでしょうね！！
- ・ 河地先生からの手紙を読んで、みんなで寄付した鉛筆などがウガンダの子ども達にあんなに喜んでもらえるとは思っていなかったから、うれしかった。ビクトリア小学校の子ども達は貧しいかも知れないけどとても明るくて元気に過ごしていて、すごいなあと思った。
- ・ ウガンダの子ども達の生活がどんな風なのか、とかわかって、自分でなんかしたい！！って思った。自分がいないもの、じゃなくて自分のお金を大切に貯めた物、でなんかしてあげたい、そんな気持ちになった。自分の小さな力でウガンダの人たちを少しでも喜ばせたらイイなあ、と思った。子ども達の生活を知って、今の私たちの生活がどれだけ幸せなのか、ちょっと考えてしまいました。
- ・ 1年3組があげた鉛筆を喜んでくれて良かったです。河地先生がウガンダに来て、いろんなことを子ども達から学んだといっているけど、先生でも子ども達から学ぶことがあるんだということを感じました。
- ・ 僕たちはいつも机とイスで生活しているのが普通だけど、ウガンダの子ども達は学校のイスにびっぴちに座って授業をするのはたいへんだろうな、と思った。親がいなくても明るくて、元気に生活しているのが、不思議に思った。
- ・ 厳しい生活をしていても、嬉しいことがあったときに心から喜んでいる様子が、河地先生からの手紙で伝わりました。

4・5限目：学活

テーマ：ハンドメイド・ハートメイドの教材を作ろう

ねらい：「筆記用具を寄贈した」→「感謝された」、次に何ができるかを考え、できることを行動に移させる

3限目のビクトリア小学校の映像と河地先生からの手紙をもとに、「私たちにできること」を考えさせた。

私自身、なにかにつけて裏紙を使用することが多く、年末にカレンダーが各家庭に余っていることから、上質紙でもあるので、費用がかからないでできる支援ということで、カレンダーの裏を使って学校に必要な教材を作ろうという結論に至った。

河地先生に相談したところ、「九九の表や掛け地図のアイデア、とっても素敵だと思います。子どもたちにとってステキなプレゼントになること間違えなし！ただし、12×12まででお願いします(笑)掛け地図は、ぜひいただけたらうれしいです！（略）

子どもたちにとって「作る」「生み出す」という行程は最高の教育になります。ぜひ、むつ中の生徒から「作ってもらおう」にとどめることなく、白紙で同じ紙をいただくことで、同じものをヴィクトリア小の子達が「作る」ことができれば幸いです！

なので、カレンダーの裏を使って作ったとしたら「むつ中の生徒の見本」とともに「白紙の同じ紙」をいただけるとうれしいです。」

との返事だったので、河地先生の気持ちも汲んで、モデルとなる掛け教材（九九の表なども含む）を作った。

生徒に配付したもの

Re:

差出人: かわちひろあき

送信日時: 2007年12月24日 16:59:08

宛先: 鎌田 幸子

コラボレーションの授業、ありがとうございました！生徒たちの感想を読んでいて、パソコンの前で一人、泣いてしまいました。。。

生徒たちはウガンダの子どもたちのことをしっかりと感じてくれていますね。

ただの同情ではなく、ウガンダの子どもたちが、自分たちの援助によって、どのように立ち上がっていくか、本当の意味での援助を考えてくれているようで、本当に感謝です！！

今は、休みに入り、任地では、子どもたちと遊んだり、ドラムのたたき方を教わったり、ソーラン節とウガンダダンスのコラボレーションを作ったり、と楽しんでいます。

週末はカンパラにあがり、隊員仲間にソーラン節を教えます。

31日の大晦日に、キングカバカ(ブガンダ王国の国王)の前で

ソーラン節を披露することになったのです！

今はそれにむかって練習しています。

ウガンダ小学校研究部といって、ウガンダの教育を隊員みんな考えていけるような研究部を山田さんと共に立ち上げたので、その準備にも追われています。

自分から忙しくしてしまうところは日本にいた頃とかわっていません(笑)

1月10日～13日まで、ウガンダを初めて観光します！！

マーチソフウォールズ国立公園という国立公園できりんやかばを見てくる予定です！

現職参加はみんなより任期が短いということもあり、時間の流れがはやく感じてしまいます。

もっと子どもたちと一緒にいたい・・・

もっと考えたい・・・

もっと話したい・・・

もっともっとという気持ち、感謝です！

九九の表や掛け地図のアイデア、とっても素敵だと思います。

子どもたちにとってステキなプレゼントになること間違えなし！

ただし、12×12まででお願いします(笑)

掛け地図は、ぜひいただけたらうれしいです！

ちょこっと提案！

子どもたちにとって「作る」「生み出す」という行程は最高の教育になります。ぜひ、むつ中の生徒から「作ってもらおう」ととどめることなく、白紙で同じ紙をいただくことで、同じものをヴィクトリア小の子達が「作る」ことができたなら幸いです！

なので、カレンダーの裏を使って作ったとしたら「むつ中の生徒の見本」とともに「白紙の同じ紙」をいただけたらうれしいです。

日本とウガンダが本当に近くに感じます！！

鎌田先生、ありがとうございます！

最後に、Merry Christmas! & Happy New Year!!

河地 洋明

そこで、小学校の教室を思い浮かべて、「ヴィクトリア小学校にあったらいいな」を考えさせた。

下北の中学校からアフリカの小学校へ

ハンドメイド・ハートメイドの教材を作ろう

河地さんからありがとうメールが届きました。

そこで、みんなから集めたカレンダーの裏を使って、ビクトリア小学校に「あったらいいな」の教材を作りましょう。

小学校の教室を思い浮かべて…

どんな教材があればいいと思いますか。

(生徒意見) 見ておもしろいもの 勉強になるもの

算数 数字のカードとか? 図形とか? 時計とか? 小学校の時に習った物を思い出してください。

(生徒意見) 図形のやつ。円の計算。12×12の表。割り算。台形の面積の計算。

グラフの書き方 九九、ただの1~100までの数字 足し算、引き算、割り算など

理科

(生徒意見) 人の体 生き物 動物の体 実験の仕方 植物の成長

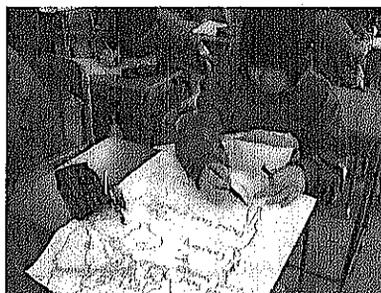
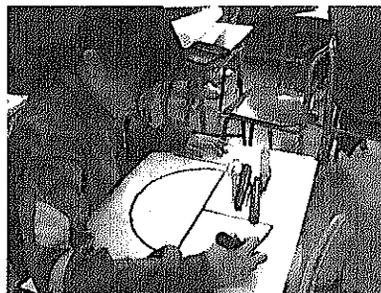
社会

(生徒意見) それぞれの大陸地図

その中で、自分たちの手で作れそうなものはなんですか。

(生徒意見) 世界地図・アルファベット、時計を書いた紙 12×12、三角形とか四角形の面積の求め方

アンケートをもとに、小グループでビクトリア小学校へ送る教材を作らせた。



(3) 授業以外での特別活動に関わる実践

① 協力隊現職参加の山田先生と河地先生からの情報など、学級通信を通して生徒や家庭に発進した。

- I : ウガンダから帰ってきてすぐの学級通信 (第71号)
- II : 「世界の笑顔のために」プロジェクトへの協力依頼 (第94号)
- III : 道徳でも扱った河地先生からのメール (第147号)

カレンダーや文房具の提供など、生徒だけでなく家庭の協力もあったので、学級通信をとおして家庭へもお知らせすることは必須であった。

またボランティア委員会の協力を得て、全校に呼びかけてもらい、「世界の笑顔のために」への協力をお願いした。その結果、学校単位での国際理解・国際協力の動きにすることができた。

これまで福祉関係のボランティアが多かったボランティア委員会であったが、活動の幅を広げることができた。今後も機会があればお願いしたいと考えている。

② 学校行事

文化祭の時期に、国際交流コーナー内にウガンダでの海外研修のコーナーを設けた。そこでは、ウガンダの自然についての写真やコメントを展示した。保護者や授業を教えていない生徒からの反響があった。生徒や保護者、地域の方々への発信についてはまだまだ課題が残っているので、今後の働きかけを検討していく。

(4) 今後の課題と成果・所感

研修前に「勉強したくても文房具がないなどの理由で勉強できない子ども達がたくさんいる」という話を聞いた。そのことを受けて学級で話をしたところ、学級・職員室からたくさんの文房具の提供があった。たくさんの文房具と提供してくれた人たちの気持ちをウガンダに持っていったことが道徳の授業の実践につながるとは当初思いもしなかった。

なにか、「心と心の架け橋になるような授業ができれば」、と思っていたが、会ったこともない人からメールが来たり、メールの向こう側、大陸を超えた地で鉛筆1本に大喜びしている姿から感じ取り、さらに教材作りへと生徒が動く姿が嬉しかった。感謝される経験の乏しい生徒にとって、遠く離れた国に住む人がまさに「地球がひっくり返ったように」喜んでくれたというのは、感じたことや「何が出来るだろうか」の自分なりの答えを行動に移す大きな原動力になったと思う。授業を進めるにあたって、河地先生からのアドバイスをたくさんいただき、「コラボ授業」「姿の見えない(でも心はある)チーム・ティーチング」だったように感じる。

「ウガンダでこれ、使ってくれるかな」といいながら鉛筆を寄付したり、「小学校の教室にどんな教材があったら勉強しやすいかな」とあれこれ話し合ったり、と(普段は道徳的な行動・実践が苦手な)生徒が考えたり、行動することは、日本とウガンダの間に架け橋ができたことの他に、子ども達の現在の国際交流・協力と未来の国際交流・協力の架け橋になったのでは、と考えている。ここで終わるのではなく、(やりっぱなしにせずに)次の可能性を追求しながら、自分が何をできるか、生徒に何をさせられるかを考えていきたい。

次年度は性教育(とくにエイズ)や環境教育、キャリア教育の一環としてウガンダを事例に取り上げる予定である。

参考文献・参考資料

NHKドキュメント「少年兵を生んだのは誰か」

10の物語 世界の人たちにもっと知ってほしいこと
ウガンダ：高まる人道危機の中心にいる少年兵たち

世界の子どもデータ

キッズ外務省

みんなで考えよう 世界を見る目が変わる50の事実(草思社)

世界がもし100人の村だったら④子ども編(マガジンハウス)

ジェシカ・ウィリアムズ

池田香代子

SUNRISE

充実した夏休み2007でしたか

連日、暑い日が続いた夏休みでしたが、満喫しましたか?健康的に日焼けしている人がたくさんいますね。(しかし、残念なことに宿題を計画的にやっていなくて後半は教室で過ごした人も多かったように思います。)

海外からの絵はがきは全員に届いたのでしょ。うか。私は今月1日~12日まで「教師海外研修【ウガンダ共和国派遣】」に参加しました。

とてもマイナーな国ですが、今まで行ったどこの国とも全然違って、見たこと聞いたことさわったこと食べたこと踊ったこと、いちいち「びっくり」していました。大自然を満喫し、人々の生活を感じ、子ども達や大人達とたくさん会話し(聞き取りづらくて悪戦苦闘しましたが)抱えている問題だったり、ウガンダの未来、自分の未来、日本の未来だったりをどっぴり考えるきっかけになりました。

「HAKUNA MATATA (大丈夫、心配ないさ)」スピリッツや「つらいときこそ笑え」精神をいたるところに感じました。

勝手に抱いていたイメージが覆され、「また行きたい」と強く思いました。(今日の6時間目に報告会をしますが、たぶん1時間で語りきれない...)

この夏休みは私にとってウガンダ5割(それ以上??)だったけれど、みなさんの夏休みはどうでしたか。

2学期は夏の終わり→秋→冬と3つの季節が含まれるように、かなり長いです。総合FWから始まって新人戦、中間テスト、文化祭、期末テスト、英単語コンテストなど、大きな行事もたくさんあります。2学期もみんな力で力を合わせて、頑張りよう!!



SUNRISE

第 94 号

文責: 鎌田 幸子

こんなメールが来ました。

ウガンダでの教師海外研修に参加したときに出会った、協力隊員からメールがきました。

お久しぶりです。お元気ですか？私はウガンダで少し大変だけど楽しい毎日を過ごしています。ブログも細々と続けているものの、車で一時間半で首都に行けるのですが、首都に行くことができない村の人もたくさんいる中で頻繁に首都に行くことはどこかためられるのですが、昨日から同僚の協力があり、車で15分の街でインターネットが使えるようになりました。今までよりはネットができるようになるかな・・・と思いながら、首都から1時間以上離れたその街には昼間に電気が通っていることが珍しいので、やっぱり今までとあまり変わらない状況かもしれません・・・。

先日 JICA の本部より、「世界の笑顔のために」の申請が正式に通ったと連絡がありました。(日本からの支援物品を JICA が送料を負担して送ってくれるというシステムです)

日本の勤務校の高津養護学校の同僚が力を貸してくれ、支援物品を高津養護学校に送ってもらえるとその後は高津養護学校の同僚が JICA とのやりとりをしてくれることになっています。申請が通った物品は以下のものです。

1. 鍵盤ハーモニカ (ピアノカ)、ソプラノリコーダー、アルトリコーダー、カセット、楽譜
2. 知育玩具 (おもちゃの時計、数を数えたり色や形を覚えることができる玩具、パズル、算数セット、定規、コンパス、分度器)

高津養護学校までの送料が自己負担になってしまうことが申し訳ないのですが鍵盤ハーモニカ1台、定規一本でも協力いただけると嬉しい状況です。

世界の音楽を聴く機会があまり(ほとんど)ない子供達に世界の音楽を鑑賞させてあげられたらいいな・・・と思い、西洋の音楽や民族音楽でおすすめの CD かカセットがございましたらご協力いただけると幸いです。

私の学校の子供達はお昼も支給されない中、朝から夕方まで元気に勉強し、遊び、夕方からは家の手伝いに精を出しています。学校に楽器は太鼓が3台あるだけですが、子供達はダンスと歌が得意で、即興で歌を作れる子供や、まだ幼いのに凄くリズムカルなダンスを披露してくれる子供など、本当に音楽性豊かな子供達に囲まれて楽しい毎日です。

自分が教えている障害児学級には今学期より2名の新入生を迎え、15人の可愛い生徒がいます。聾の子がほとんどで、知的障害の子が2名、身体障害の子が1名です。聾教育の経験がないので何とも申し訳ないのですが、できることを少しずつ少しずつ頑張っています。どの子も個性的でとっても可愛いです。

学校に通うことができる障害児は極少数で、ほとんどの障害児達は村の中で牛や犬と変わらぬ待遇のもと、ひっそりと暮らしているそうです。来月からは自転車で村の巡回に繰り出す予定です。

学校では先生にも生徒にも給食がなく、教員が使える文房具も本当にわずかなものしかなく、生徒達の教科書は授業中に3～4人に貸し出されるという割合です。持てないくらい短くなった鉛筆を2、3人で回して使っていたり、日本の現在の状況とはかけ離れた状態にあります。

今回皆さんから支援していただく物品は自分の学校はもちろん、近隣の中学校、小学校の特殊学級、他の隊員が働く小学校の普通学級、エイズ孤児の施設で使用させていただく予定です。

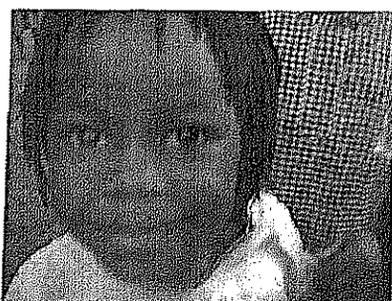
皆様におかれましてはお忙しい毎日をお過ごしのことと思います。お体に気をつけてご活躍なされますことをウガンダよりお祈り申し上げます♪



ウガンダの学校の切実な状況をかいま見てきただけに、山田先生（というのが聾学校で働くこの協力隊員のお名前です）からのメールにぜひ応えたいなあと思いました。

前回、夏にウガンダに行ったときに、参加した先生方でノートを寄贈しました。河地先生は大喜びだったのですが、それ以上に、もらった子ども達の笑顔が忘れられません。勉強したくても、するためのものがない子ども達にとっては、たとえおさがりであってもいただいたものは宝物です。

もし、協力して頂いただけのなら、小学校の時に使ったっきりでこれからも使わないかな、という算数セット、ピアノなどの学習用具を提供していただければと思います。



「世界のえがおのために」プロジェクト

ご協力おねがいたします。

SUNRISE

第147号

文責:鎌田 幸子

青森県むつ市立むつ中学校1年3組のみなさん

はじめまして、ウガンダビクトリア小学校の河地洋明です。鎌田先生を通じて、鉛筆をはじめ、文房具を寄付してくれて本当にありがとうございます。

埼玉からも寄付してもらって、12月7日の3学期の終了式で一人一人の手に渡すことができました。350人の手に日本からの鉛筆が手渡され、子どもたちは、地球がひっくり返ったように喜んでいました。

本当にどうもありがとう！



ウガンダに来て、まだ半年、やっと生活に慣れてきたという感じですが、子どもたちからたくさんのことを学んでいます。来たばかりの頃は、アフリカらしさって何だろう、日本の子どもたちに何を伝えよう、など、考えすぎていたのかもしれない。

最近、「先生、あそこにカメレオンがいるよ」とか「そろそろ雨が降ってくるね」など、子どもがいう一言一言から、「あ、アフリカにいるんだなあ」と実感するようになってきました。

鎌田先生たちは、夏にビクトリア小を訪れた際、子どもたちの笑顔に感動し、その足で500冊近いノートを買って届けてくれました。「子どもたちはノートさえないんです。」といった自分の一言に、すぐに反応し、先生方で寄付してくれた500冊のノート。ビクトリア小の子どもたちは心から喜んでその寄付を受けました。

会って次の日に、山のようなノートを届けてくれた先生方のその行動力に、人のあたたかさを感じていたようです。援助って何だろう。時々考えさせられます。でも、先生方のその援助は子どもたちに物をくれたのではなく、心をくれたのだな、と感じました。

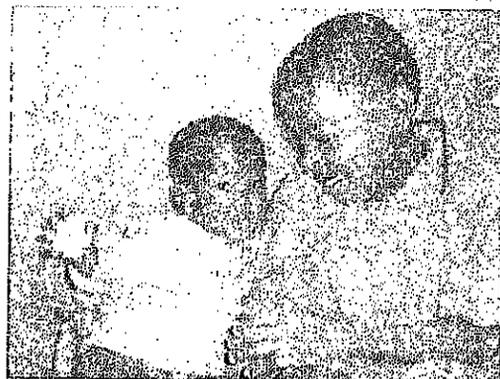
そして、帰り際に置いていってくださった、日本の子どもたちからの鉛筆や文房具、「一人一人に同じ時間に渡したい」「誰かがもらい、誰かがもらえなかった、そんなことから笑顔になってほしい」というみなさんの思いを、悲しみにしてほしくない」そんな思いから、ずっと家に保管しておいて、ようやく、「クリスマスプレゼントが届いたよ」と言って、12月7日に子どもたちに渡しました。

少し時間がたってしまいましたが、みなさんの気持ちを、確実に子どもたちに届け

ました。安心してください。

日本にいる間、教員という仕事をしながら、若くしてガンになってしまった子どもたちやひきこもりになってしまっている子どもたち、不登校の子どもたちに対して、ボランティアをしていました。新潟の地震の時も、現地に行って、避難所のボランティアをしてきました。その時々、人の命の尊さ、ボランティアはしているのではなく、ボランティアを通して学ばせてもらえることなどを感じてきました。

そして、今、アフリカに来ることが許されて、ボランティアとして、ウガンダの小学校で働いています。20歳の頃からの夢だった、アフリカに行きたいという夢が、7年たってようやく叶いました。夢が叶ったというのは、また新たなスタートである気がします。今、目の前にいる子どもたちからたくさんのことを学ばせてもらっています。親を病気で亡くしてしまった子どもがいます。自分もいつ死んでしまうかわからない病気になってしまっている子どももいます。生まれた時から、お父さんの顔もお母さんの顔も知らないまま、この学校にいる子どももいます。



でも、みんながきらきらした顔をしています。何でそんなにきらきらしているのかなあ、と不思議に思うくらいです。上の子が下の子の面倒を見て、さらに下の子が入ってきたら、今度は下だった子が上の子のマネをして面倒をみる…。この学校は家族みたいな学校です。ここで、この子どもたちと出会えて本当によかったと思います。

むつ中学校1年3組のみなさんは、もうすぐ、2年生になりますね。私が、小学校の先生になりたいと思ったのは中学校2年生の時でした。いろいろなことを考えたり、動いたりする時期なのかもしれませんね。

鎌田先生のおかげで、ビクトリア小学校の子どもたちとむつ中学校のみなさんがつながれたこと、心からうれしく思います。本来なら、手書きで手紙を書きたかったところですが、年末までに青森に届くかどうか不安だったので、このようにして感謝の手紙とさせていただきます。

寒さがきびしくなってくる頃だとは思いますが、ウガンダの子どもたちも厳しさを喜びにかえてがんばっています。厳しい時こそ、うれしいことがあったときは2倍も3倍もうれしく感じたりして・・・。

みなさんの気持ちがウガンダの子どもたちのその喜びとなりました。

2008年、ますますみなさんが輝けることを、ウガンダから祈っています。

Merry Christmas and A Happy New Year!!

ウガンダ青年海外協力隊
ビクトリア小学校 河地洋明

みんなのことを知らない人だけでも、1年3組みんなに感謝をし、みんなの輝きを願っている人が遠くの地にもいます。見えない人の笑顔を想像できますか。

平成19年度教師海外研修実践報告書

タイトル (テーマ) ウガンダとバングラデシュの子供たちの現状について

岩手県立大迫高等学校 教諭 渡部 章朗

実践教科 LHR 時間数 1時間

対象生徒・学年 本校全学年 対象人数 127名

(1)

本校では、昨年度3月に「国際理解講話」として青年海外協力隊経験者の吉田敬子さんに講話をしていただいた。講話では、2年間の現地の生活を通しての体験や、現地の人と自分の考え方の違いなど、実際に体験した人ならではの話を聞くことができ、生徒が大きな視野を持って海外へ目を向けるよいきっかけとなった。また、その直前には福島県二本松でJICAの「国際協力実体験プログラム」に参加希望の生徒がおり、引率で私も参加する機会を得た。ここでも、各学校で行われている文化祭などでのフェアトレードや、留学生との交流などさまざまな取り組みについての話を聞くことができ、生徒だけでなく私にとってもとても有意義なものであった。

以上のことから、国際協力について関心を持っている生徒は私が思っている以上に多いのではないかと思う。

今回の研修後の実践では、計画的なカリキュラム案を組んで行うことはできなかったが、HRや今年度の国際理解講話として生徒向けに話をする機会を作ることができた。向こうで買った物や、写真を題材に私が見てきたこと、聞いてきたことを話すと、自分たちの今の生活と比べて様々な感想を持った。

(2) 授業の詳細

私の担当教科は数学であり、力不足で教科内での実践についての具体的なカリキュラム案が浮かばなかった。

①出発前のアフリカに対するイメージについてのアンケート

ウガンダも含めて(生徒はウガンダを知らないので)アフリカというくくりで簡単な自由記述のアンケートを行った。生徒はどういう風な考えを持っているのかを確認する。

☆質問項目(抜粋)

1. あなたのアフリカのイメージは?
2. あなたの考える「国際協力」どういうこと?

★生徒の解答

1について

貧しい、暑い、砂漠、黒人、野生動物など

2について

貧しい国を助けてあげること、困っている人を助けてあげること

いろいろな国や人々がお互いに助け合う、

ボランティア、資金援助など

アフリカはよくわからないという解答が多く、書かれているものも大体想像通りであり、改めて私たちとは馴染みが薄いのだなと感じた。アフリカについては、歴史や地理でもほとんど出てこないのが情報が少なく、イメージがかなり固定化されていると感じた。なかには見当違いなことを書く生徒もいた。ウガンダの地図上の位置は生徒は誰も知らなかった。

国際協力についての質問では「～をしてあげること」という考えを持っている生徒が多かった。中には「お互いに」という言葉を使う生徒もいたが、援助をする側と援助される側があるという一方方向的な考えを持っている生徒が多いと感じた。

②HRにて

ウガンダで、クラスの生徒へ図1のストラップを買ってきた。障害児学校の子供たちが作ってくれた物で、一つずつ作ってくれた子供の名前の入ったメッセージカードが付いていて、1500シリング（約120円）で販売して自分たちの生活費にしているようだ。

生徒へは、ウガンダにいるときに話題にでた「援助慣れ」という言葉をいれて、自分たちと同じか小さい子供たちが学ぶために生活費を自分たちで稼いでいることを紹介した。

「援助慣れ」という言葉は生徒にとって新鮮だったようだ。国際協力というと「～をしてあげる」というイメージが多かったのが、生徒は不思議そうな顔をしていた。私がウガンダに行って感じたなかで一番驚いたことが、赤道へ行ったときに道ばたであった4歳ぐらいの子供に突然「Give me money」と言われたことだった。会ったばかりの人に平然とこのようなことを言えることにとても驚いた。

ただ、お金を何もしていない人にあげてしまうことと、小さいことでも何か自分たちで努力してがんばって、その対価としてお金をあげることの違いについて短いHRの時間では会ったが生徒に考えさせた。

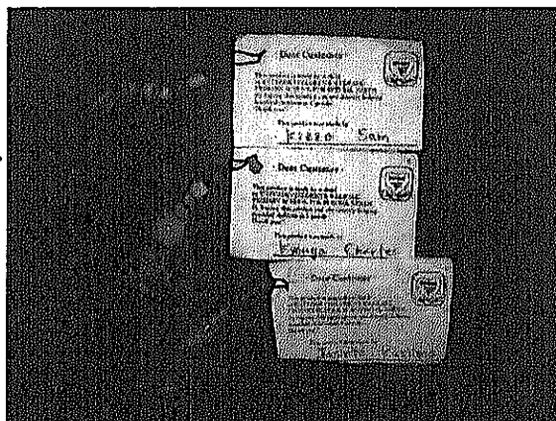


図1 ストラップ



図2 赤道で会った子供たち

②国際理解講話（図3）

バングラデシュへ行かれた花巻農業高校の川村ゆう子先生にも来ていただいて、現地で撮影した写真を写しながら、バングラデシュとウガンダの街や食べ物など生活、特に現地の子供たち学校の様子などを紹介した。ウガンダの町並みや食べ物の紹介をした。

ウガンダでは、エイズが多いことや生活が厳しいことから孤児が多い。子供たちは学校で集団生活をしていて、学校で牛を育ててミルクを採っていたり、子供たちの寝室（図5）や洗濯場など私が見てきた実際の生活の様子を話した。私たちが行った日は雨が降っていて、とても暗く、外は地面が雨でグチャグチャ、建物の中まで雨水が入ってきて衛生状況はよくない。学校の建物には窓はなく、電気ももちろんなく、天気の良い日のDVDを見たら、こんなところで勉強できるの？と生徒から声が聞こえた。日本ではちょっと寒くなったら服を上に着ることもなく「暖房まだ入らないの？」と言う生徒が当たり前だが、ウガンダと日本の違いを感じてくれたでしょうか？

私たちは、学校ではほとんどすべての人が同じように勉強することができているけど、あちらでは、たとえば教科書は使い回しだったり、給食があるにはあるけどお金を払えない子はもらえなかったりと、平等ではない。毎日学校に行くことができる生徒は少ない。でも、このようなちょっと日本では考えられないような環境でも、子供たちはいい笑顔で勉強している。

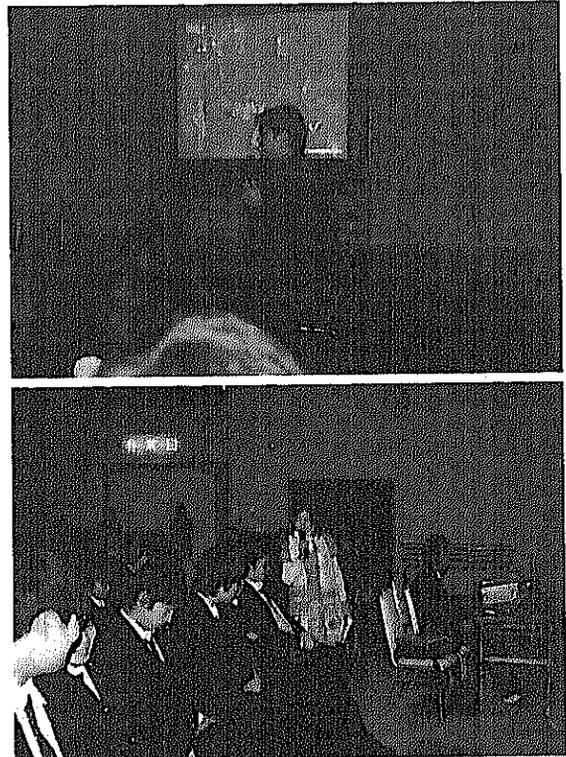


図3 国際理解講話の様子



図4 マトケ

ウガンダの伝統料理
バナナを蒸して作る。
食感は焼き芋のような感じ

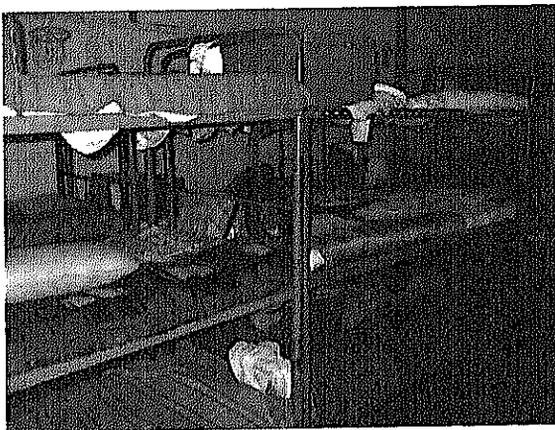


図5 学校の女子のベッド
湿気でジメジメしていて
衛生環境はよくない

国際理解講話を終えての生徒の感想から（抜粋）

- ・ 苦しい環境の中でも笑顔でいる子供たちをみてすごいなあと思った。
- ・ ウガンダやバングラデシュの子供たちは、食べ物に困っていたり、学校に行けない子がたくさんいて、それに比べると自分たちは恵まれていることを改めて実感した。
- ・ 自分がどれだけ狭い世界と常識の中にいるのかわかった。貧しくても楽しく生きている人たちに比べて、私たちは何不自由なく暮らすことで大事なものをなくしてしまったんだと思う。
- ・ 貧しい国でも皆明るく楽しそうで、恵まれた先進国で暮らす私たちがくだらないことで争ったりしているのが恥ずかしかった。
- ・ 物がありすぎると人は幸せがわからなくなるのかなと思った。
- ・ 孤児が多いことにとても驚いた。日本とは本当に生活の仕方が違うのだということがわかった。
- ・ 日本より発展の遅れている国でも「今の生活が幸せ」と言えるのがすてきだと思った。
- ・ 私たちの暮らしとはかけ離れた生活環境で生きている子供たちのはずなのに、子供たちはとても純粋で素直な笑顔をしていて、逆にうらやましくなった。「お金があることが幸せではない」ということを感じた。
- ・ スラム街で生活するストリートチルドレンの存在はショックで、私だったらどうするだろうと考えてみても、何も浮かばなかった。
- ・ ウガンダとバングラデシュの話は聞く前は暗い話なのかと思っていたけどむしろ明るい話だった。
- ・ ウガンダの学校は教室の数が少なかったり、雨の日はとても暗かったりで授業するのがとても大変そうだった。
- ・ 日本は多くの物を食べれて、多くのことを学べて、私たちの生活がとても恵まれていることを感じた。一人でも多くの子供が学べる時代がきてほしいです。
- ・ 同じくらいの年の子供たちなのに全く違う世界に住んでいるようだった。そのような国で日本人が青年海外協力隊などでがんばっていることはすごいことだと思った。
- ・ 授業で聞いたり、教科書の写真で見た物と同じで、変だけど本当だったんだと思ってしまった。
- ・ 世界には生きることに必死になっている子供たちがいることを知った。
- ・ 日本は豊かな国ではあるが、笑顔が少ない国なのかなと感じた。

(3) まとめと考察

今回の実践では、生徒には自分たちと同じくらいの年の子供たちでも、自分とは全く違う暮らしをしている子たちがいるのを感じてもらえたのではないかなと思う。同じ講話でも生徒による感じ方がそれぞれ異なっていて、「自分たちの今の生活は恵まれていることを実感した」という感想が多かったが、ほかにも「このような場所ではがんばっている協力隊の人はすごい」とか「マトケはおいしいのか？」などいろいろな感想を書いてくれた。私は、このように普通の生活をするにも厳しいところがあって、その人も協力隊の人もお互いが生活をよりよくしようとがんばっている世界があるということを生徒に知ってもらい関心を持つことで、自分の興味の幅を広げてほしいと思った。向こうで買ってきた物や写真を題材にして話をすると、生徒もいろいろなことを想像して考える材料として具体的に考えることができる。生徒は、ウガンダのような発展途上国は援助をしてもらおう側という認識が強かったようだが、発展途上国での生活をよりよくするためにしている努力について少しは理解してもらえたと思う。

今回で生徒が持ってくれた興味をなくさないためにも、これを深めるような教材を作らなけれ

ばいけないと感じた。今回の実践ではLHRやHRでの話を私がする形で行ったので、計画的な実践を取り入れることができなかつたのが課題であると思う。興味を持った生徒には、もうひとつ進んだ実践ができるような活動が必要だと思った。1時間で終わるような形では限界があるので、継続できるように教科のカリキュラムに組み込む必要があると思うが、数学のカリキュラムにうまく合わせて入れることができなかつたことが今後の課題である。

幸いにも、海外に興味を持って将来は協力隊で海外に行きたいという生徒がいて、国際科に進学して勉強するというので、このような生徒がいてくれることにとってもやりがいを感じる。これからも生徒に海外へ目を向けさせるような工夫をしていきたいと思う。

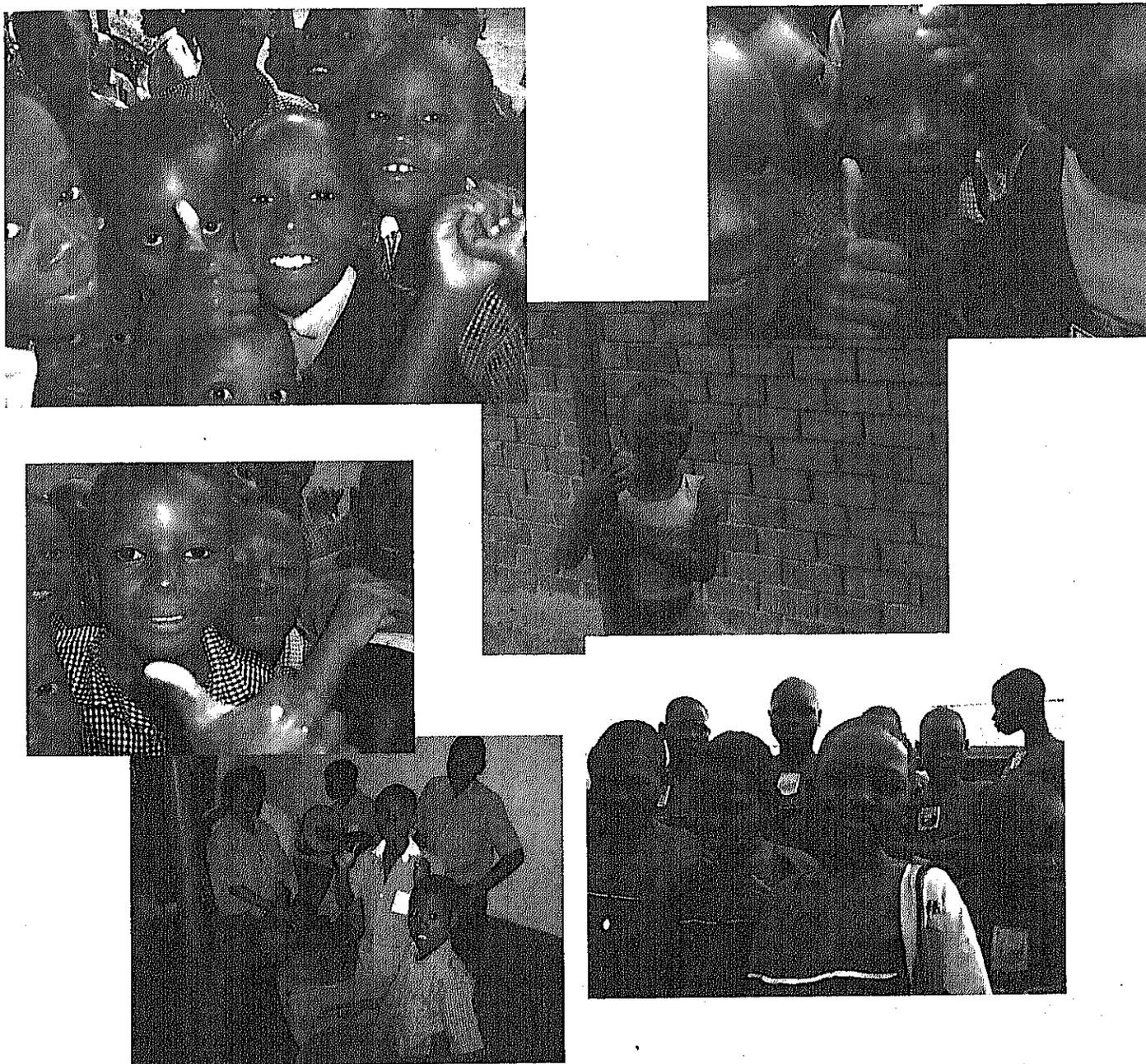


図4 ウガンダで出会った子供たち